

[home](#) • [artnews](#) • [artists](#)**Joanna Piotrowska's Unsettling Photography Forcefully Confronts Hidden Violence**BY ALEX GREENBERGER  
November 30, 2020 3:16pmJoanna Piotrowska, *Untitled*, 2019.  
©JOANNA PIOTROWSKA

ジョアンナ・ピオトROWSカの奇妙で時には不穏な写真の中では、個人がしばしば不思議なほど親しみやすい位置に配置されています。互いの顔を押し合い、まるで戦闘しているかのように、あるいは互いの周りを回ったり、覆いかぶさったりして、親密なようでいて、少し暴力的でもある、そんな光景が場面によって繰り返されます。彼女の真っ黒な写真は、潜在意識を突いて、日常的な相互作用、特に家庭内で行われるものの中にある奇妙な力関係に関連した思いがけない連想を引き起こします。

ピオトROWSカの写真は、彼女の母国であるポーランドだけでなく、世界中の人々を魅了しています。最近では、ワルシャワのザチェタ国立美術館で展覧会が開催されました。まだ40歳になっていないピオトROWSカ作品は、MoMAの権威ある「ニュー・フォトグラフィー」展シリーズやベルリン・ビエンナーレに出品されているほか、ブラダのイメージを撮影したり、ロンドンのテート・ブリテンで展示を行ったりしています。ロンドンを拠点に活動する彼女は、先月、ポーランドの中絶禁止令に反対する女性の権利団体のために、自身の写真のエディションを販売し、話題となりました。

ピオトROWSカ氏の写真について、ARTnews がメールでインタビューしました。以下にその内容をご紹介します。

ARTnews: あなたの作品の多くは、家庭内の空間とそこに蔓延する緊張感をテーマにしています。家などのどこに興味をお持ちですか？

ジョアンナ・ピオトROWSカ

家庭内の空間は、非常に豊かで複雑な小宇宙です。

私たちは、経済、哲学、現象学、労働など、さまざまな視点から家庭内の空間を考察することができます。家庭環境とそのすべての側面についての記述は尽きることがありませんが、私たちの家は、私たちと同じように常に変化し続けています。家は変化し続ける私たちの自己と身体の延長線上にあり、無限の物語の源となっています。政治や歴史は、個人の家の建築物、カーペット、家具、オブジェだけでなく、家族の関係や上下関係、ゲーム、ジェスチャー、日常の状況の中にも存在しています。私は、一見見慣れたジェスチャーや活動を考察するために、家庭生活やインテリア

に目を向け、これらの場所や個人的な経験についての私たちの仮定に挑戦するような文脈でそれらを提示したいのです。

あなたの作品には、モデル同士が対峙しているように見えるものが多くあります。あなたは、作品の中でしばしば脆弱性を扱っていると述べています。なぜそのようなコンセプトに惹かれるのでしょうか？

私は人間関係に興味があり、人間関係を築くためには弱さが必要です。脆弱性があるからこそ、他人を見ることができ、自分も見てもらえるのだと思います。ある意味、私は自分の作品を通して、人とつながること、本物であること、そして人との関係において安全であることの意味を探ろうとしているのだと思います。それらのすべてが生まれる場所は、多くの場合、脆弱性です。残念なことに、今日の社会の多くは、不平等や古めかしい権力構造の上に成り立っており、脆弱性は弱さとして認識されています。

“Frowst” シリーズでは、身体のジェスチャーやポジションが家族の機能を物語ることを考えています。このシリーズはどのようにして作られたのでしょうか？

私がファミリーコンステレーションに出会ったのは、姉が心理学を学んでいた頃で、家にはベルト・ヘリンガーの本がありました。ファミリー・コンステレーションは、ポーランドでは比較的一般的なもので、この方法の創始者であるヘリンガーは、時には自らセッションを行うこともありました。まず、言葉による表現に完全に頼らないセラピーを発見したことは、とても興味深いことでした。第二に、この方法を観察するのはとても興味深いことでした。それは、ちょっとした演劇のような感覚です。それは、本物の強い感情を“舞台”で表現しながら、役に入り込むことです。そこには（私の理解では）ちょっとした操作があり、セラピストが解読する曖昧なボディランゲージがたくさんあります。この方法は、シャーマニズム、心理学、セラピストの直感などの要素を組み合わせたものです。私たちがいかに過去の世代の歴史と強く直接的につながっているか、また、大きな社会的・政治的問題がいかに個人的な家族のシナリオに反映されているかを示してくれます。

私はこのセラピーを信じているわけではありませんが、私たちの身体は社会的・政治的な経験を伝えるものであり、伝統的な核家族の単位は、より広範な抑圧と権力の構造を再生産するものだと考えています。

ファミリー・コンステレーションにインスパイアされた私の作品は、すべてが演出されており、同じ動きが何度もカメラの前で繰り返されることもあります。単純で、時には非常に親密な瞬間を演出するという人工的な要素は、家庭内の空間や、私が一緒に仕事をしている非常にリアルな家族のメンバーの真正性とうまく調和しています。このような演出と現実の組み合わせが、私の描く不気味な雰囲気大きく貢献していると考えています。

最近では、写真のプリント販売で得た資金をポーランドの女性権利団体に寄付されていますね。あなたの写真は、社会における女性の地位に関わる問題にどのように取り組んでいますか？

私の作品のほとんどは、不平等やそれに対する周囲の不快感を暗示しています。しかし、社会における女性の立場への関心を最も直接的に反映しているのは、護身術のマニュアルから引用したボディランゲージにインスパイアされたプロジェクトです。これらの作品では、目に見えない、名前をつけたり捕らえたりすることができない可能性のあるものと、身体的に闘っている女性の姿を見ることができます。これは、体系的な人種差別や暴力によく見られるものです。私は、中絶の全面禁止という見通しに非常に不安を感じ、何週間も街頭でデモ行進を行った何十万人もの女性たちに深く感動しました。最初の2、3日は眠れず、とても怒りを感じていました。作品を寄贈するというアイデアが生まれたのは、現在ザチェタ・ナショナル・ギャラリーで開催中の私の個展をキュレーションしてくれたマグダレーナ・

# HAGIWARA PROJECTS

1-13-6-1F Tokiwa, Koto-ku, Tokyo 135-0006 Japan  
T/F: +81 (0)3 6300 5881 E: info@hagiwaraprojects.com  
www.hagiwaraprojects.com

コムルニッカとの会話がきっかけでした。ポーランドで最も大きなフェミニスト団体のひとつを支援するために、他の人たちと一緒にかなりの金額を集めることができたことに、私たちは驚き、そして本当にうれしく思いました。

あなたの作品の多くはモノクロで撮影されていますが、これはドキュメントのためのフォーマットであるとおっしゃっていました。この点について、どのような興味をお持ちですか？また、なぜモノクロで撮影することが多いのでしょうか？

私は、フィクションとリアリティ、現在と過去の交わりに興味がありますが、モノクロ写真の美学には、それらすべての側面が共存していると考えています。白黒のイメージはより縮小されているので、ジェスチャーをよりよく表現できると思います。

これは私の作品にとって重要な要素です。白黒写真では、すべてがより抽出され（抽象化され）、体と物がより簡単に互いに融合します。

様々なシリーズを制作している中で、あなたの作品にインスピレーションを与えるものは何ですか？また、何か参考にしているものはありますか？

私の作品の大部分は、人間の日常的なやりとりやジェスチャーに基づいています。例えば、私が触られた時の感触が、アイデアとして登録され、内部で拡張されます。一つの作品が次の作品につながることも多く、それらが連鎖してシリーズ化されていきます。私は数年前から、人間が設計した動物のための建築物に非常に興味を持っていて、地元や旅先の動物園に多くの時間を費やしています。最初は動物の囲いを記録していましたが、ある時、多くの囲いの中に、動物を豊かにするための特定の物が入っていることに気づきました。その物体は、後に制作したショートフィルムの焦点となりました。その中のひとつに、動物を扱うために作られた肘まである手作りの革手袋がありました。この手袋を撮影したのは、これまでの作品にあった「触る」という要素を再び取り入れるためでした。このように、モチーフや題材は常に繰り返されており、それを継続的に利用することができます。

“Shelters”シリーズでは、リスボン、リオデジャネイロ、ワルシャワ、ロンドンで仮設住宅を撮影しました。一つの都市ではなく、複数の都市で撮影することを優先したのはなぜですか？また、このシリーズを制作するにあたり、どのようなことを考えていましたか？

役割を交代することを考えていました。このプロジェクトは、子供が大人を演じるゲームをベースにしていますが、映像の中では大人が子供のゲームをしているのです。子供から大人へ、現在から過去へという変化は、私の以前のシリーズで、大人に子供の頃のイメージのジェスチャーを繰り返してもらうというものがありますが、それと同じです。

隠れ家やシェルターを作る行為には、この種の子供の遊びの特徴である無邪気さと遊び心があります。しかし、幼い頃の文脈から離れて大人が遊ぶと、肉体的・精神的な安らぎを求めることの深刻さや、移住やホームレスの問題、物の蓄積や物質主義の概念など、思いがけない性質が前面に出てきます。手作りの隠れ家は、子供の遊びや生活には十分なように見えますが、大人が住むと危険なほど不安定で壊れやすくなります。また、家の中に作られた家にはユートピアのような側面もあり、精神的・肉体的な安全性や物質的な快適さを追求しても十分に満足することはできないようです。シェルターを作るというゲームを様々な場所で行うことで、より普遍的な性格を持ち、場所を超えた人間の生来の弱さを明らかにすることが重要でした。

In Joanna Piotrowska's strange and sometimes disturbing photography, individuals are often arranged in positions that appear uncannily familiar. They push at each others faces, as though locked in combat, or they are slung around or over one another, in tableaux that can feel intimate or slightly violent, depending on the setting. Her stark black-and-white pictures needle at the subconscious, drawing up unexpected associations having to do with the bizarre power dynamics that course everyday interactions, in particular the ones that take place in the home.

Piotrowska's photography has proven captivating, not only in her home country of Poland, where it was recently the subject of an exhibition at the Zacheta National Gallery of Art in Warsaw, but also far beyond. Not yet 40 years old, Piotrowska's work has been included in the Museum of Modern Art's prestigious "New Photography" exhibition series and the Berlin Biennale; she has also shot images for Prada and exhibited at Tate Britain in London. Last month, the London-based artist made headlines when she sold editions of one of her photographs to benefit women's rights organizations aiding in the fight against an abortion ban in Poland.

To hear more about Piotrowska's photography, ARTnews interviewed the artist by email. The conversation follows below.

ARTnews: Much of your work has been concerned with domestic spaces and the tensions that pervade them. What interests you about homes and the like?

Joanna Piotrowska: Domestic space is an incredibly rich and complex microcosm. We can examine domestic spaces from many different perspectives: through the prism of economy, philosophy, phenomenology, labor, and many others. There has been endless writing on the home environment and all its facets, yet our homes are continually changing, as we do. They are extensions of our ever changing selves and bodies, making them a source of endless stories. Politics and history reside not only in a private home's architecture, carpets, furnishings, and objects, but also within family relationships and hierarchies, games, gestures, and everyday situations. I like to look into domestic life and interiors to [consider] seemingly familiar gestures or activities and present them in a context that challenges our assumptions about these places and interpersonal experiences.

Many of your images have featured models who appear to be confronting one another. You have stated that you are often dealing with vulnerability in your work. What draws you to that concept?

I'm interested in relationships, and to be vulnerable is a necessary part of forming relationships. It is through our vulnerability that we can see others—and that we can be seen. I think in some ways, through my works, I'm trying to search for what it means to connect, to be authentic, and to feel safe in relation to another person. A birthplace for all of those is often vulnerability. Unfortunately, many of today's societies thrive on inequality and archaic power structures where vulnerability is perceived as weakness.

In your series "Frowst," you consider the way that body gestures and positions can be telling about the way that families function. How did you go about making this series, and to what extent are the positions in it staged?

I came across [the therapeutic method] Family Constellation when my sister was studying psychology and we had Bert Hellinger's books at home. Family Constellations were relatively common in Poland and Hellinger, the founder of the method, would sometimes even run sessions himself. Firstly, it was really interesting to discover a therapy, which does

# HAGIWARA PROJECTS

1-13-6-1F Tokiwa, Koto-ku, Tokyo 135-0006 Japan  
T/F: +81 (0)3 6300 5881 E: info@hagiwaraprojects.com  
www.hagiwaraprojects.com

not rely fully on verbal expression. Secondly, I found the method fascinating to observe—it feels a bit like theatre. It involves stepping into a role with a great deal of authentic, strong emotions expressed on a “stage.” There is a bit of manipulation (in my understanding) and lots of ambiguous body language decoded by the therapist. The method is a combination of some elements of shamanism, psychology and therapist’ s intuition. It shows how strongly and directly we are connected to the history of past generations and how bigger social and political problems are reflected in personal family scenarios.

I’ m not really a believer in this particular therapy, but I believe our bodies are carriers of socio-political experience, and I think that the traditional nuclear family unit reproduces wider structures of oppression and power. This can have a devastating effect on individuals, especially within Catholic society, which presents another layer of rotten relationships.

My works inspired by Family Constellation are entirely staged, with the same movements sometimes repeated before the camera many times. That element of artifice of staging simple and sometimes quite intimate moments combines well with the authenticity of domestic spaces and the very real family members I work with. I believe this combination of staged and real largely contributes to the uncanny atmospheres I portray.

You recently donated funds gained through the sales of prints of one your photographs to women’ s rights organizations in Poland. How do your photographs engage issues associated with the position of women in society?

Most of my work contains allusions to inequality and a surrounding discomfort with it. However, the project which most directly reflects my interest in the position of women in society is the one inspired by the body language taken from self-defense manuals. In these works we can see women in a physical struggle with something invisible and potentially impossible to name or capture, something which is so common for systemic racism or violence. I was very disturbed by the prospects of a total abortion ban and deeply moved by the hundreds of thousands of women who marched in the streets for weeks. For the first couple days, I couldn’ t sleep and felt very angry. It was through conversations I had with Magdalena Komornicka, who curated my solo exhibition currently on view at Zacheta National Gallery, that the idea for the donation of a work emerged. We were both surprised and really happy that together along with others we could raise a significant sum of money to support one of the biggest feminist organizations in Poland.

Many of your works have been shot in black and white, which you have mentioned is a format more often reserved for documentation. What interests you in that respect? Why do you more often choose to shoot in black and white?

I’ m interested in the intersection of fiction and reality and the present and the past, and I think all those aspects somehow coexist in black-and-white photography aesthetics. The black-and-white image is more reduced and therefore I think better frames gesture, a critical quality for my practice. Everything is more distilled (abstracted) in black-and-white images—the bodies and the objects more easily merge into one another.

What inspires your work as you are crafting your various series? Are you drawing on any sources as you work?

Everyday human interactions or gestures inform a large part of my work. For example, the way in which I’ ve been touched can register and be internally expanded as an idea. One work often leads to another, so a chain of these



# HAGIWARA PROJECTS

1-13-6-1F Tokiwa, Koto-ku, Tokyo 135-0006 Japan  
T/F: +81 (0)3 6300 5881 E: info@hagiwaraprojects.com  
www.hagiwaraprojects.com

opens up into a series. For a number of years, I have been very interested in human-designed architecture for animals, so I spend a lot of time in zoos, both locally and in my travels. I began by documenting animal enclosures and at one point I noticed that many enclosures contain specific objects used for animal enrichment. Those objects became the focal point for a short film I later made. One of the objects I came across was a pair of elbow-length handmade leather gloves designed for handling animals. I photographed these gloves to reintroduce the element of touch from some of my previous work. So there is always a repetition of motifs and subjects which I can continually draw upon.

For your “Shelters” series, you photographed makeshift homes in Lisbon, Rio de Janeiro, Warsaw, and London. Why did you make it a priority to shoot in several cities as opposed to just one? What were you thinking about when you made that series?

I was thinking about shifting roles. The project is based on a game in which children play adults, yet in the images, we see adults playing a children’ s game. That shift from childhood to adulthood, from present to past, is also a touchstone in one of my earlier series in which I asked adults to repeat gestures taken from their childhood images.

In the act of building the hideout, the shelter, there is an innocence and a playfulness that characterizes this sort of children’ s game. However, when taken out from its youthful context and played by adults, unexpected qualities come to the foreground: the seriousness of seeking physical and emotional comfort, problems of migration and homelessness, as well as notions of accumulation of goods and materialism. These hand-assembled hideouts seem to be perfectly sufficient for a child’ s game—or even their life—but look dangerously unstable and fragile when inhabited by an adult. There is also an aspect of utopia in a home built within a home—as if the seeking of emotional or physical safety or material comfort was never fully satisfying. It was important for me to perform the game of building a shelter in various places so it has a more universal character and reveals an innate human vulnerability that transcends place.